

重松 ● この物語の表面的なストーリーは、転校生としてほかの学校に行った子がまた同じ学校に戻ってくるという話なんだけど、転校以外にもいっぱい応用可能なんだよね。例えば一年、二年と仲が良かったけれど、三年、四年でクラスが離れて、五年生でまたいっしょになったとき、変わらず仲良しだと思っていたら別のグループができちゃった、という微妙な温度差ってあるじゃない。



『新しい友達』※1

現行版小学国語教科書 五年（上）の第一教材として掲載されている作品。引き続き、平成17年度版小学国語教科書に掲載。

物語はどんな読み方があってもいい

対 談



重松 清

しげまつ きよし
作家



石井 睦美

いしい むつみ
児童文学作家

子どもたちに今を肯定させるという点

重松 ● ぼくは、石井さんの『新しい友達』（五年上）※1を拝読してすぐ身にしみたし、いいなあと思いました。ぼく自身、転校が多かったこともありすが、今の子どもたちにとっても、五年生になるとクラス替えの経験が多いということがあると思うのです。石井さんは、主人公のまりちゃんのようにほかの学校に転校して、しばらくたつた後、また元の学校に戻ってくるような経験をされたんですか。

石井 ● 転校は一度だけしました。でも、この作品は、娘が二年生か三年生のときに仲の良かった子がロンドンの学校に転校したことがきっかけになっています。その子は帰国して別の学校に行ってしまうのですが、娘は戻ってきてほしいと願っていたし、それで、お話では戻ってくるという設定にしたのです。

石井 ● 子どもたちは、日々変化をしながら成長していくわけですから、自分が変わったことはあまりわからないと思う。でも、転校することで時間のブランクができると、その変化がありありとわかることってあると思います。そんな違いのようなものを書いてみたかったです。

重松 ● 子どもたちがこの作品を読む四月という時期は、まだ昼休みに四年生のときのクラスメートと廊下で会っているころでしょう。そこからだんだんと新しい学年のクラスで友達を作っていく、広がっていくと思うん



です。だから、『新しい友達』を読むときに、先生方には、最終的に「友情はかくあるべし」とは落としてもらいたくないですね。

石井 ● わたしがこの作品でもう一つ書きたかったことは、自分自身でさえ、昨日の自分には会えないんだ、ということ。重松さんの作品『流星ワゴン』（講談社）の中で、主人公が未来を変えようと思い、過去の大切な時点に何度か行きますね。こうしてなんとか軌道修正をしようとするけれど、もう過ぎ去ったことは変えようがない。それ、わたしにはすごくわかるんです。とても大事なことですし。だから、それも含めて書いてみたかったですね。

重松 ● ぼくは教育というのは、子どもたちに今を肯定させること、そのために知っておかなければいけないツールやスキルをもたせることだと思うのね。これまで、将来に役立つからという発想で教えていたんだけど、こんな時代になると、子どもたちにとってはそんなに勉強してもいいことがないって感じになってしまう。でも、そ



のは、運動がまったくできなかったから。大人になってからも、わたしはあまり子育てがうまくないので、せめてと思って、娘には本をめっちゃたくさん読んであげたのです。娘が四年生くらいまでは、わたしが本を読んでもました。絵本が多かったですね。

重松 ● ぼくは、江戸川乱歩の『少年探偵シリーズ』がほんとうに好きだったから、それを娘に買ったんだけど、やはり女の子と男の子は違うんだよね。本を見て、「何これ。」と言って、「だめだ。」なんて（笑）。

うではなくて、いちばん大事なことは、今を肯定するためのツールとして、やはり「九十九」は知っておいたほうがいいよ、という感じだと思っ。

物語でも、「ハリー・ポッター」のように現実逃避するのではなく、現実を肯定させてあげることが大事だと思うんです。だから、『新しい友達』で描かれているように、まっさらなスタートってあり得ないんですよ。特に高学年になると、小学校時代もそろそろ終わりだなど、女の子は思い出志向になったりするじゃないですか。それぞれの子どもに歴史がありますからね。そんなところをしっかりと味わってもらいたい。子どもたちがこの作品を読んでいて、友達の顔がポツと浮かんでくれたらこの物語は勝ちでしょうね。

■一冊の本をきっかけに読書が広がる■

石井 ● わたしはとてもよく本を読む子どもだったんです。本を読むことが好きだった

その代わりに、今は少女マンガについて娘と話をしています。「お父さんもお母さんも中学一年生のころにはこの世界はわかったぞ。まだお前単純だな。」と言いな。

ぼくは、子どもたちに「おすすめの本」を質問されることが多いけれど、〇〇先生がほめていたからとか、何かの指定図書になっているから、ではないと思う。いちばん強い推薦の言葉は、「お母さんもこれを読んでおもしろかったから。」や「お父さんもガキのころ、これ読んだんだ。」だと思っ。

石井 ● わたしが娘に自分で読めばと言った



ら、「絵本って読んでもらうものじゃないの？」というセリフを吐いたくらいに自分では読まなかったのです。わたしの人生ではないし、あの子が何を読もうが読まなからうがまったく関係ないという気持ちもどこかにあったので放っておいたのですが、娘は、ある日、一冊の本をきっかけに突然本を読みだし、その本から読書がどんどん広がっていきました。人はいつから本を読みだすのかわからないものなんですね。

重松 ●それはわからないよね。それこそ個人差があると思うし、始まりが教科書であってもいいんです。学校の模擬試験で出題されたから、その続きが読みたくなって読むというのもありだものね。ぼくは、開高健の『裸の王様』が模擬試験に出ていて、どうしても続きを読みたくて文庫本を買っちゃったもの。本との出会いはなんでもありだと思うんだ。だから、親として先生として、そのきっかけはたくさん与えたいね。そこから、いつその餌に食いつくかは本人の問題だよ。

もしれない。教科書掲載の作品を書くときは、やはり正座をしたような気分になっちゃう。

重松 ●ぼくは子どものころ、国語の教科書に落書きをすることがすごく好きでした。夏目漱石の顔写真にサングラスをかけたたり、「ラク顔」といって教科書の落書きコンテストをしたこともあります。そこには、教科書を相対化するというのか、漱石に負けないぞ、という子どもなりの精いっぱい思いがあったと思うんです。だから、物語の読み方や楽しみ方もいろいろあっていい。石井さんの『新しい友達』だったら、「挿絵の女の子がかわいいから好き」というのもいいし、『カレーライス』を読んで「カレーライスが食べたくなった」という感想でもいいわけです。

石井 ●『カレーライス』で言えば、主人公の男の子がもう一回カレーライスを作ってしまうところが、ああ、男の子だなんて思いました。女の子だったら、カレーは作らないかもしれない（笑）。



■物語の読み方はいろいろあっていい■

石井 ●重松さんの書き下ろし作品『カレーライス』（六年上）※2を拝読しましたが、同じカレーライスを素材にした作品で『ピタミンF』（新潮社）がありますね。あの作品では、一歩踏み込んで人間の負の部分を描かれています。そんなところまで教科書でもたどり着けたらいいな、と思いました。

重松 ●教科書は、なかなかそこにいけない。「教科書どおり」という言葉は、いつも悪い意味で使われるじゃない。でも、教科書は出発点であって、そこから発展して図書館などで石井さんや重松が書いた本を読んでもいいんです。『カレーライス』は、とりあえずこのくらいは読んでほしい、そんな思いで書きました。「教科書絶対主義」でもなく、教科書を否定するわけでもない付き合い方ってあるでしょう。

石井 ●わたしは、教科書とかかわるとき、ついお行儀がよくなっちゃうんですね。もしかしたら、教科書に負けているのか

重松 ●教科書で物語を読むときは、そうして何か突っ込みを入れてくれればいいと思うのです。『新しい友達』だったら、坂本君のどころを読んで、「こんなやついいねえよ」でもいいし、「こいつ何かすかしているな」でもいいんですよ。そんな感想を許してくれる教室であってほしいですね。

『カレーライス』※2

重松清さんによる小学国語教科書初の書き下ろし作品。平成17年度版小学国語教科書（六上）の第一教材として掲載される。



■物語の楽しみは読み返すこと■

石井 ●先日、ある国語研究会で講演をした後、懇親会で先生方にこんなお話をしたんです。一度読んだ小説をしばらくたつた後にまた読むと、以前には全然わからなかったことがわかる、と。そしたら、ある先生が、二年、三年のとき教科書で読んだ教材を五年、六年でもう一回読んでみると、子どもたちはどういう反応するだろうか、ぜひ試みてみたいとおっしゃったんです。

重松 ●それはすごくいい発想ですね。物語の楽しみというのは、ほんとうは読み返すことなんだと思う。

石井 ●子どもたちの小学校六年間の成長はすごいでしょう。だから、例えば、二年のときに読んだ物語をどういうふうに感じたのか、タイムカプセルのように残しておくこともいいなと思うんです。あのときはこのように感じたけれど、もう一回読み直したらこうだったと振り返ることは、その先の読書体験として大きいでしょう。

た別の感想があるかもしれない。『カレーライス』に登場する父親を「ケッ!」って思ってもいいし、いざ自分が親になったらこの主人公みたいな息子がいいな、と思ってもいいと思います。

石井 ●そうですね。重松さんの作品をほかにも読ませていただきましたが、ところどころにカレーライスが出てきますね。ああ、ほんとうにカレーがお好きなんだな、と(笑)。

重松 ●そう、カレーライスが好きなんですよ、ぼく(笑)。物語はどんな読み方があるてもいい。だからこそ、それを受け止める先生方のやわらかさ、懐の大きさが問われると思います。そして、物語を読むということは、ストーリーがわかればいいというものではなく、付き合っていくことだと思うんです。子どものときから大人になってからも、人生の伴侶^{はんりょ}として付き合ってもらいたい。そう思っ**て**ぼくらは作品を書いているんです。子どもが三十人いたら、三十の読み方ができるものを、ぼくたちは二人とも書いたつもりです。

重松 清(しげまつ きよし)

1963年、岡山県生まれ。出版社勤務を経て執筆活動に入る。91年『ピフォア・ラン』(幻冬舎)でデビュー。99年に『ナイフ』(新潮社)で坪田譲治文学賞、『エイジ』(朝日新聞社)で山本周五郎賞、2001年『ビタミンF』(新潮社)で直木賞受賞。



石井 睦美(いしい むつみ)

1957年、神奈川県生まれ。出版社勤務を経て執筆活動に入る。『五月のはじめ、日曜日の朝』で花いちもんめ小さな童話大賞、新美南吉児童文学賞を受賞。駒井れんのペンネームで『パスカルの恋』(朝日新聞社)を執筆し、朝日新人文学賞を受賞。



重松 ●すごく大きいと思う。それはある種「読みの遠近法」みたいなもので、子ども向きの作品は成長しながら付き合っていくわけですからね。ぼくは四年生のとき、ルナールの『にんじん』(ポプラ社)を読んだのですが、主人公は史上最低のいじけた少年で、つまらないやつだなんて思ったんです。

でも自分が中学生になり、親との関係がうまくいなくなってきたから再び読むと、けっこうおもしろい。そして、大人になってから読み返すと、今度は主人公を虐待するお母さんの側になって読んでいます。

石井 ●以前、『五月のはじめ、日曜日の朝』という犬の死をテーマにした作品を書きました。それを読んだある子どもは感想が、五年生のときには感動したんだけど、もう少したってから読むと騙^{だま}されたかなという気持ちもある、というものでした。わたしはほんとうにいい感想だなと思ったんです。

重松 ●『新しい友達』がずっと記憶に残って、中学生になって読み返してみると、ま

ぜび先生には、三十とおりの読みを許容してもらいたいですね。

石井 ●先生には、こうした作品を好きに授業していただきたいです。子どもがどの先生と出会うかということは、子どもがどの家族になるかわからないのと同じくらいわからないことです。だからこそ、生身の人間としてそこに立つてもらいたいと思います。

重松 ●ぼくたちもがんばったので、先生方にもポジションにすぎることなく、一人の人間としてがんばっていただきたいですね。特に国語の物語を教えるときは、それが問われると思うんです。

この対談は、光村図書ホームページ「光村チャネル」の「シーズン・メッセージ」に掲載されています。

<http://www.mitsumura-tosho.co.jp/>